

自由研究発表

「理想の技能実習生」の対照化
—工業地域および地方都市の比較から—

Contrasting "Ideal Trainee": Analyzing Differences Between Local Cities and
Industrial Areas

ワオデ ハニファー イスティコマー (一橋大学/橋本財団)

WAODE HANIFAH ISTIQOMAH

(Hitotsubashi University/Hashimoto Foundation)

1993年創設された「外国人技能実習制度」は、母国の経済発展の担い手となる途上国からの若者を対象とし、日本の技能・技術を修得させる形で国際貢献を目的とする。当制度については、実質的な期限付き労働力「ローテーション・システム」としての機能や、劣悪かつ搾取的な労働環境、技能実習生の「脆弱性」について、多くの研究者によって指摘されている（佐野, 2003 ; 巢内, 2019）。技能実習制度に関する研究は、長らく日本国内の状況に焦点が当てられたが、送り出し国への関心が相対的に低く、法律や送り出し機関の実態に焦点を当てる傾向がある。当制度による個人や送り出し社会への影響に関する研究は、未だに限定的である。

本研究は、上述の問題意識から、技能実習生の送り出し国上位であるインドネシアを事例にして、帰国した技能実習生の経験に着目する。インドネシアでは、主に政府関係者から、日本での就労や滞在経験を通じて参加者のスキル向上や帰国後の起業が期待されている。前述のいわゆる「理想の技能実習生」の像が多様なアクターによって共有され、再生産されている。本研究では、西ジャワ州の工業地域で有名な「Cikarang・チカラン」と地方都市の「Cirebon・チレボン」という二つ異なる地域で、技能実習生としての経験が帰国後の就労やキャリアに与える影響について考察していく。つまり、「理想の技能実習生」の対照化を試みる。個人の経験を全体的に理解するために、移動経路（移動前・日本滞在中・帰国後）を一貫して分析する。制度創設から30年が経ち、当制度のいわゆる「帰結」に目を向けるのは、決してインドネシア国内や地域コミュニティへ影響や問題だけではなく、日本への影響を明らかにする機会につながるものと考えられる。

参考文献

佐野哲, 2003, 「国際的な労働力需給システム」依光正智編『国際化する日本の労働市場』東洋経済新報社, 37-58.

巢内尚子, 2019, 『奴隷労働—ベトナム人技能実習生の実態』花伝社.